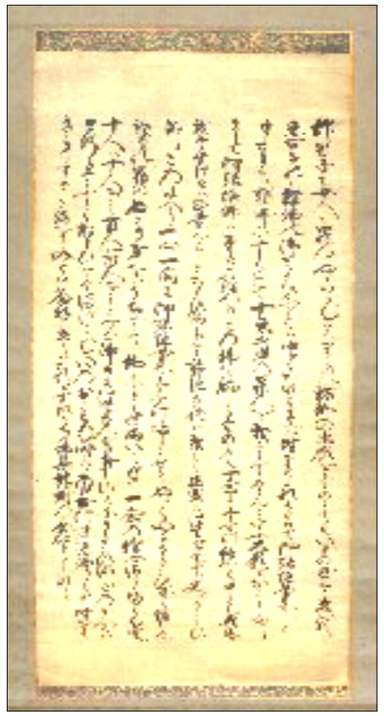
男子も女人も

四月二十九日、西山美世子様の満中陰法要でご自宅に伺ったとき、仏壇の横に軸（左の写真）が掛けてありました。「何のお軸ですか」とお尋ねしたところ、「祖父が本山からいただいたものです」と、続いて「昭和五十五年四月一日豊原大潤先生からいただいたものとお軸の裏に書いてあります」と返答がありました。

法要を始める前、法衣に着替えながら仏間を見回すと本山からの表彰状があるのに気づき、よく読むと昭和五十五年本山で執行された第二十四代即如門主伝灯奉告法要の際に受けられたもので表彰状と一緒にいただかれた褒物（記念品）の掛軸と分かりました。

祖父西山徳佐さんの金光寺護持のご功績をたたえ、先代（松井依章）が表彰者として本山に推薦したものでしょう。

掛軸は蓮如上人御著作『御文章』五帖目第四通「男子も女人も」章のご文でしたので、満中陰のお取り次ぎを終えて肝要の御文章は「男子も女人も」章を拝読したことでした。



▲　お祝いの掛軸

さて、『御文章』「男子も女人も」章とは？

抑男子も女人も罪の深かゝらんともがらは、諸佛の悲願のたのみても、いまの時分は末代悪世なれば、諸佛の御ちからにては中々かなはざる時なり。これによりて阿弥陀如来と申奉るは、諸佛にすぐれて、十悪・五逆の罪人を我たすけんといふ大願ををこしましまして、阿弥陀佛となり給へり。この佛をふかくたのみて一念御たすけ候へと申さん衆生を、我たすけずは正覚ならじとちかひまします弥陀なれば、我等が極楽に往生せん事は更にうたがひなし。このゆへに一心一向に阿弥陀如来たすけ給へとふかく心にうたがひなく信じて、我身の罪のふかき事をばうちすて佛にまかせまいらせて、一念の信心さだまらん輩は、十人は十人ながら百人は百人ながら、みな浄土に往生すべき事、さらにうたがひなし。このうへにはなをなをたふとくおもひたてまつらんこゝろのをこらん時は、南无阿弥陀佛南无阿弥陀佛と、時をもいはずところをもきらはず念佛申すべし。これをすなはち仏恩報謝の念佛と申すなり。あなかしこ、あなかしこ

というご文です。

罪深い自分との自覚がない我々ですが、間違いなく悪人のこの私です。

末法の時代に住む罪深い我々は諸仏の力ではとても救われません。しかし、阿弥陀如来は十悪五逆の悪人をも救うという願をおこし、み仏となられた方。「私を深くたのんで二心なく信じるあなたたちをたすけることができなければ、私はさとりをひらかない」と誓われた阿弥陀如来だから、私たち衆生が浄土に往生することは疑いありません。

一心に阿弥陀如来にこの身そのままおまかせして、お救いくださる阿弥陀さまと疑いなく信じる念仏相続の日々を過ごしましょう。

法語の世界

《原　文》

前々住上人蓮如は御門徒の進上物をば、御衣のしたにて御拝み候ふ。また仏の思し召し候ば、御自身の召し物までも、御足にあたり候ば、御いただき候ふ。御門徒の進上物、すなはち聖人親鸞よりの御あたと思し召し候ふと仰せられ候ふと云々。

（『蓮如上人御一代記聞書』二百九十七）

《現代語訳》

蓮如上人は、ご門徒からの贈物を衣の下で手をあわせて拝まれるのでした。また、すべてを仏のお恵みと受けとめておられたので、ご自身の着物までも、足に触れるようなことがあると、うやうやしくおしいただかれるのでした。「ご門徒からの贈物は、とりもなおさず親鸞聖人から恵まれたものであると思っている」と仰せになりました。

初盆会について

今年初盆会をお迎えになるご家庭にあって、時間を決めてご親戚、知人の方々にご案内をし、お斉を準備される際は、早めに時間決定の相談をお願いします。

現在、今年初盆会を迎えられる物故者数は２１人です。相談をいただいた順にお参りの時間を決めていきます。

時間を決められないご家庭もご連絡を下さい。